続猿蓑集 巻之下

春之部

花桜

2964 温石のあかるゝ夜半やはつ桜　露沾

2965 寝時分に又みむ月か初ざくら　其角

2966 顔に似ぬほつ句も出よはつ桜　芭蕉

2967 ちか道や木の股くゞる花の山　洞木

新日本古典文学大系 70

㊀上野洋三校注

2964 ○温石　石を温めて身体にあてるもの。寒気の際や、腹病・積聚（しゃく）などの療治に使う。▽桜の花の咲きそめたといったよりの聞かれるころ、そろそろ温石も不要になってくる。抱いて寝る温石なので「あかるゝ」といった所が技巧。季はつ桜。朗温石。

2965 ▽咲きそめの桜の、初心な美しさよ。夕月の淡い光にも似ている。夜ふけて寝につく頃にもう一度眺めてみたいと思うような。五元集には「露沾公御庭にて」と詞書がある。季初ざくら。朗寝時分。

2966 ▽咲きそめの桜の、初心な美しさよ。これを言いとどめようとすれば、自分の老醜など忘れ去って、思い切ってうぶな心に帰らなくてはなるまい。元禄七年（一六九四）秋、伊賀での作。土芳の三冊子に、先ず上五七ができ、これにふさわしい下五を求めて「初桜」を得たという。季はつ桜。朗ほつ句。

2967 ▽たまたま近道を求めて入りこんだ所が、一帯は咲き乱れる桜の花の山なのであった。差し交す枝と枝とが、花のトンネルを作り、見上げれば、天に花の網を張り広げているのである。季花の山。朗近道・木の股。

2968 角いれし人をかしらや花の友　丈草

2969 花散て竹見る軒のやすさかな　洒堂

富貴なる酒屋にあそびて、文君が爪音も、酔のまぎれに思ひいでらるゝに、

2970 酒部屋に琴の音せよ窓の花　惟然

2971 賭にして降出されけりさくら狩　支考

2972 人の気もかく窺はじはつ桜　沾徳

2973 くもる日や野中の花の北面　猿雖

2974 七つより花見におこる女中哉　陽和

2968 ○角いれし人　前髪の額際を剃り込み角をたてた少年。元服二、三年前の人。▽花見に浮かれ出てきた人々の中に、若者の一団がいる。かしらだつものは、元服前の角前髪。いかにも威勢のよい花見である。季花の友。朗角いれし・かしら。

2969 ▽すっかり花の散りすぎた後、軒近き竹の葉が風に揺れるのを眺める。もう風のたびに、落花の心配をする必要はない。ああ、この解放された心持よ。季花散りて。朗ナシ。

2970 ○文君　和漢朗詠集「相如ハ昔、文君ヲ挑（いど）ミテ得（う）」。司馬相如が富家の娘卓文君を妻に得た故事。相如の琴の音を聴いて、文君は心を動かして逢い、ついにともに走った、という。また、相如と文君は酒舎を買って酒を売ったという。○酒部屋　酒造のための建物。▽豊かな酒家での花見の宴。酒蔵の高い窓のあたりに桜の枝が伸びている。ここで琴の音がすれば、富豪・酒家・琴と、卓文君の三題噺になるところ。季花。朗酒部屋・琴。

2971 ▽桜の花の頃の、晴雨定まらぬ天候。賭けてもよいなどと請け合って、花見に出かけてきたのだが、ついに降り出してしまった。花の雨に対する恨みごとを、賭けに負けた恨みに託して具体的に表現しようとしたもの。季さくら狩。朗賭。

2972 ○人の気　他人のご機嫌。▽他人のご機嫌をうかがうについても、これほどまでに心を労するということはあるまいものを。まったく桜の花の咲き始めの頃というのは、いまかいまかと気を使うことである。季はつ桜。朗気。

2973 ▽曇った空を背景に、原なかの一本の桜が満開である。その北がわの花の微妙な陰影。銀の屏風に描かれた白い桜の底力にみちた美のような味わいがある。あら野ざらし「薄曇りけだかくはなの林かな」や、同じ作者の炭俵「雪の日やうすやうくもるうつし物」などに通う、白色の中に見分けられる微妙な階調を描く。季花。朗ナシ。

2974 ○七つ　夜明けの時刻を六つと定めて、その二時間前が七つ。○おこる　活動しはじめる。▽女たちとはたいへんなものだ。花見となると、夜明けより二時間も前から起き出して、化粧だ、弁当の支度だと騒ぎ始める。季花見。朗七つ・おこる・女中。

2975 見る所おもふところやはつ桜　乙州

2976 咲花をむつかしげなる老木哉　木節

2977 我庭や木ぶり見直すはつ桜　沾荷

2978 二の膳やさくら吹込む鯛の鼻　子珊

2979 蓑虫の出方にひらく桜かな　卓袋

田家

2980 蒟蒻の名物とはんやま桜　李里

2981 咲かゝる花や飯米五十石　桃首

▽桜のたよりが近くなる頃、見るにつけ、思うにつけ、なにごともすべて、花に結びつけてしまう。咲きそめの桜のあの美しさを想像して。季はつ桜。聞ナシ。

2975 ▽老木の桜。花は時節にうながされて、やむにやまれず咲くのであるが、老木ともなると、自分で自分の花が、わずらわしいと思っているのではないか。自然に枯淡の境地にあこがれて。季花。聞むつかしげなる。

2976 ○見直す　底本「見留す」。▽ふだんは気にもとめないでいた庭の樹木。一本が見事に桜の花をつけ始めた。あらためて、その樹木としての形が気になって、あの枝、この枝を批判がましい心持で眺める。季はつ桜。聞木ぶり。

2977 ○二の膳　本膳に次いで出す膳。二の膳、三の膳と続く。▽豪華な料理の続く膳。風に散る桜吹雪。その花びらがとどまった所は、膳中の王者鯛の鼻。大看板の花形役者の芸がびたっときまった趣をいう。季さくら。聞二の膳。

2978 ▽蓑虫の雄は春に蓑を出て成虫となる。その頃、桜の花も開くのである。わびしきものの代表のごとき蓑虫と、春の花の代表の桜との取り合せをいう。季桜。聞出方。

2979 ○田家　いなかの住居。また田中の庵。漢詩題であり、和歌題でもある。○蒟蒻　山間に栽培される。▽この片田舎に美しい山桜が咲き誇る。これにふさわしい美肴は、さして期待できまいが、せめて蒟蒻くらいはあろう。ところでこのあたりは、これをどのようにして食わせてくれるのが自慢なのかね。蒟蒻は、さしみ・なます・汁・煮物・串焼・菓子・ころばかし・吸物など、田舎料理の万能選手であった。季やま桜。聞蒟蒻・名物。

2980 ○飯米五十石　飯米は食用に供する米。扶持米五十石を支給される武士。▽桜が枝をのばして花を咲かせようとしている。この家の主は五十石取りの武士。身分と花開こうとする桜との照応がねらいらしい。炭俵の三三「五人ぶちとりてしだるゝ柳かな」と同じような趣向（続猿蓑註解）。季花。聞飯米五十石。

2982 山門に花ものゝ〳〵し木のふとり　一桐

2983 ながれ木の根やあらはるゝ花の滝　如雪

2984 花笠をきせて似合む人は誰　其角

2985 はれやかに置床なをす花の春　少年一鷺

2986 ぬり直す壁のしめりや軒の花　卓袋

2987 一日は花見のあてや旦那寺　沾圃

2988 八重桜京にも移る奈良茶哉　仝

2982 ○山門　三門。寺院の門。▽お寺の門前の桜の木。いかにも安定したとり合せのように見えるのだが、木の方にどこか大層なところがあって、違和感を覚える。どうやら古木の幹がやや太すぎて、山門を圧倒する勢いがあるためらしい。源氏物語・若菜「いと清らに物物しく太りて」とある。季花。聞山門。

2983 ○ながれ木　浮木。歌語である。○花の滝　激しく花の散るさま。また落花を浮かべて落ちる滝。歌語である。▽流れ木の浮きつ沈みつしているあたりに、落花が激しく散り込む。あたかも根についた泥を洗い落すかのように。季花。聞ナシ。

2984 ○花笠　花を挿した笠。▽爛漫の花の下、花を楽しむ人々の流れは、いかにものどかな光景をつくりあげているが、さて、この人々の中で、花を笠に挿して、それでもその花の勢いに負けないような人物となると、さあ誰がいるであろうか。季花笠。聞ナシ。

2985 ○置床　台の広板を壁の前に据えて仮に床の間とするもの。○なをす　正しくは「なほす」。▽豊かに咲き誇る大ぶりの桜の枝を瓶に挿す。花の占める空間にあわせて、瓶を置く床板の位置を左右調節する。めでたくすがすがしい春の雰囲気が、そこに現出した。季花の春。聞置床。

2986 ▽軒ばに花を見る。この時節にあわせて、壁を修復したのだが、花のころの雨に、なお湿りが残る。桜の花の美しさを端正に鑑賞したいという姿勢を見せる。季花。聞しめり。

2987 ▽花の頃の寺。檀家の人々のために、一日くらいは開放していただかなくてはなるまい、と心づもりをしているのであろう。檀家の人々が、この春の花見の計画の中に、自家の菩提寺を入れて、ついでに墓参をすませる、と解する立場もある。季花見。聞一日・あて・旦那寺。

2988 ○八重桜　詞花集「いにしへの奈良の都の八重桜けふここのへに匂ひぬるかな」。○奈良茶　奈良茶粥。略式の茶飯。▽奈良の都の八重桜は、京に移されたそうだが、そればかりでなく、奈良茶飯もまた一緒に移ってきた。花見の頃の食事に、この簡略な茶粥が手軽に用いられたものか。季八重桜。聞京・奈良茶。